

本研究の目的は以下の 4 つの研究課題を解明することにより、上記の研究課題を解明することにより、ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの使用実態を明らかにすることができるだけでなく、それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態と日本語オノマトペの学習意識、学習方法を通して、日本語オノマトペの学習におけるそれぞれの有利な点、不利な点も明確にし、ベトナム語母語話者と中国語母語話者のために、日本語オノマトペ教育の有益な示唆を提案することである。

#### 【研究課題 1】

ベトナム人学習者と中国人学習者が日本語オノマトペとその学習に対してどのような意識を持っているか、日本語オノマトペをどのような方法で学習しているか。

#### 【研究課題 2】

ベトナム人学習者と中国人学習者が日本語オノマトペをどの程度、適切に使用できているか。言い換えれば、両国の学習者による日本語オノマトペの正答率はどの程度であるか。

#### 【研究課題 3】

ベトナム人学習者と中国人学習者が当該のオノマトペがわからない場合、どのように日本語オノマトペを産出するか。言い換えれば、両国の学習者が産出した日本語オノマトペにどのような傾向が見られるか。

#### 【研究課題 4】

ベトナム人学習者と中国人学習者のそれぞれの母語におけるオノマトペの使用実態はどのようなになっているか。これが日本語オノマトペの使用実態にどのように影響をしているか。

これまで、日本語オノマトペは「感覚的で理屈では割り切れないもの」「日本語教育において十分に重視されていない」「オノマトペの辞書の説明がわかりにくい」などが要因で、外国人学習者にとって難関の一つであることが先行研究でしばしば指摘されている（張：1989、金：1989、彭：2007、有賀：2007 等）。実際、学習者がどの程度、日本語オノマトペがどの程度使用できているかという実証研究はまだ限られるように思われる（中石ほか 2011、吉永 2011、飯田ほか 2012、吉永 2017）。しかし、これらの研究の研究対象者は、今まで日本語学習者数のトップを走っている中国語を母語とする日本語学習者（以降、中国人学習者）にとどまっている。

大関（2010）は「私たちは母語知識を持っているからこそ、外国語を効率よく学習できるのです。」と述べている。つまり、日本語学習者は日本語を学習している中で、母語の知識を生かしながら学習している。世界言語にはオノマトペが豊富な言語とそうではない言語があるため、学習者による日本語オノマトペの習得状況を調べるためには、母語にオノマト

ペが多い言語とそうではない言語を母語とする学習者を調査対象者にする必要がある。また、外国語の学習に母語の知識が影響を与えているが、それがすべてではないということも大関（2010）に指摘されている。例えば、日本語オノマトペの学習には、母語の知識も影響を与えているが、そのほかに、日本語オノマトペに対する学習意識、学習方法など個人差の影響もあると考えられる。

本研究は、母語にオノマトペが豊富に存在するベトナム語を母語とする学習者と、母語にオノマトペが少ない言語である中国語を母語とする学習者が、日本語オノマトペに対してどのような意識を持っているか、どのような方法で学習していくかということを確認にした上で、日本人の原語生活に頻出する 21 語のオノマトペを再生する独自に制作したアニメーションを調査材料とし、ベトナム人学習者と中国人学習者が日本語オノマトペをどの程度、適切に使用できているか、知らないオノマトペをどうやって産出しているかということを検討すると同時に、ベトナム語と中国語それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態も調査し、それが日本語オノマトペの使用実態にどのように影響しているかということも考察する。このように、本研究は、日本語オノマトペに対する学習意識、学習方法を調査した上、学習者の母語におけるオノマトペの使用実態も考慮し、母語にオノマトペの豊富な言語とそうではない言語の日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態の実証的研究ということで、従来になく独創的な研究である。

本研究は以下の通り、10 章から構成されている。

第 1 章は「はじめに」ということで、上記の 4 つの研究課題を設定する背景、研究課題の詳細と章立てについて述べた。

第 2 章では日本語オノマトペの定義を概観した後、その形態的特徴、用法について整理し、最後に本研究における日本語オノマトペの選定基準を設けた。日本語オノマトペは研究者によって様々で、呼び方も様々である。擬音語・擬態語という言い方もあり、より詳細な下位分類として、「擬音語」「擬声語」「擬態語」「擬情語」「擬容語」という呼び方もある。本研究では、総称してオノマトペという言い方を採用している。

また、日本語オノマトペの形態が複雑で、その分類方法も様々ある。日本語オノマトペの形態に関する分類し方は学者によって異なるが、基本的には 1 モーラと 2 モーラの基本形からなる。そのうち、「XYXY」「XっYり」「XんYり」という 3 つの形態が日本語オノマトペのもっとも代表的な形態であると言われている。

日本語オノマトペの用法であるが、特別な語群であるため、「副詞用法」「動詞用法」「名詞用法」「形容詞・形容動詞用法」「引用用法」「文外独立用法」という多くの役割を果たしている。このうち、副詞（特に様態副詞）として働くことが多い。

また、日本語オノマトペを構成する要素の中で、いくつかの母音と子音は特有の意味を表している。この音象徴のルールを知っておくことによって、出会う日本語オノマトペのニュ

アンスをある程度感じることができると思われるため、こうした特徴を学習者に教えるべきだという声もある。

日本語オノマトペの表す意味とその形態によって「オノマトペ度」が異なっている。ある語がオノマトペであるかどうかという判定に関して、日本語母語話者の間ではある程度一致する。これはそれぞれのオノマトペの「オノマトペ度」の違いによると思われる。本研究では、便宜のため、4冊のオノマトペの辞書の中で2冊以上の辞書に記載されている語をオノマトペとして取り扱った。最終的に、正確さを期すため、日本語教育学を専攻する日本語の母語話者7名により、4名以上に認定された語をオノマトペとしている。

第3章ではベトナム語と中国語におけるオノマトペの概要について述べた。本研究はベトナム人と中国人による日本語オノマトペの使用実態を調査するとともに、ベトナム語と中国語におけるオノマトペの使用実態も調査した。そのために、第3章では、ベトナム語と中国語におけるオノマトペについての概要を述べた。具体的には、ベトナム語と中国語におけるオノマトペの定義、形態、用法、音象徴という観点から見てきた。

ベトナム語には日本語と同様に、擬音語と擬態語の語群が数多く存在し、その定義がはっきりしており、ベトナム語の国語教育においても一つの項目として取り上げられている。ベトナム語には、*Từ láy*「反復語」という語群があるが、この反復という造語法は表現効果が高いと言われ、多くの場合、ベトナム語の擬音語・擬態語が*Từ láy*「反復語」と重なっている。ベトナム語の研究の中で、擬音語・擬態語を研究対象として正面に取り上げられている研究が少なく、*Từ láy*「反復語」の反復造語法の音象徴や表現効果についての研究が盛んである。辞書に関しても、ベトナム語のオノマトペ辞書はなく、*Từ láy*「反復語」の辞書が多く出版されている。

ベトナム語のオノマトペの形態であるが、基本的には1音節からなるものと2音節以上からなるものがある。2音節からなるもののうち、一つの音節が基本となり、残りの音節がその基本の音節を何らかの形で反復する。反復形の種類としては「語頭子音の反復」「音韻の反復」「語末子音の反復」がある。

ベトナム語のオノマトペの用法であるが「形容詞用法」「動詞用法」「副詞用法」「単独用法」（日本語オノマトペの「文外独立用法」と同じ）がある。

また、ベトナム語のオノマトペの場合、それを構成する母音、子音、音韻の音声的特徴とその表徴している意味が密着関連している。つまり、ベトナム語のオノマトペも日本語オノマトペと同じように、音象徴語であると考えられる。

これに対して、中国語では擬音語という概念は存在しているが、擬態語という概念は正式に取り上げられていない。しかも、その数も日本語オノマトペに比べ遥かに少ない。中国語においてオノマトペが少ない原因として、中国語の動詞は日本語の動詞より動作を細かく表すことが多く、擬態語の代わりに形容詞を用いることが多いと言われている。そして、口語では擬声語・擬態語の表現が使われているが、一旦文字化されると、漢字で表せないもの

があったり、文章語としての体裁を整えるために削られたり、他品詞に改められたりすることとも言われている。

中国語のオノマトペの形態であるが、1音節からのものと2音節からのものがある。2音節からなるものは、AA、ABB、AABB、ABAB、ACAB という反復の形を持っている。そのうち、オノマトペの形態によってある語が擬音語か擬態語か形態によって識別できるものがある。このように、言語は異なっているが、日本語、ベトナム語、中国語のオノマトペにおいて、何らかの反復形を持っている語が存在していることがわかる。つまり、反復という造語法はオノマトペの描写効果に直接貢献していると言える。

中国語オノマトペの用法であるが「独立用法」「連用修飾用法」「連体修飾用法」「述語用法」「補語用法」「特殊用法」という機能に整理することができる。

音象徴についてであるが、中国語オノマトペは日本語オノマトペのような清音と濁音の対立しているものではなく、有声音・無声音  $b \cdot p/d \cdot t/g \cdot k$  などのものがあり、二音節からなる擬声語の子音の対応において、同じようなものが選ばれる傾向があると言われている。そして、中国語オノマトペの音象徴は具体的な母音、子音、音韻により決まるのではなく、オノマトペの形態（例えば、A パターン、AA パターン、AB パターン、ABB パターンなど）によって決まる。

第4章では先行研究と本研究の位置づけについて述べた。本研究は日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態・産出実態、それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態を明確にした上で、日本語オノマトペの教育に有益な示唆を得ることを目的としているため、先行研究として、日本語オノマトペの教育に関する研究を概観し、その知見を参考にしながら、問題点を指摘し、本研究の位置づけを合わせて示した。本研究では、日本語オノマトペの「教育」とは「指導」と「学習」の両立であるという考え方を採用する。オノマトペ指導に関して「オノマトペ指導に関する考え方」「オノマトペ指導の現状」「指導における問題点」「基本語彙選定」「指導法の提案」といった内容の研究を概観し、オノマトペ学習に関して「学習者が困難である原因」「習得状況に関する実証研究」「学習支援・教材開発」といった内容の研究を概観した。

日本語オノマトペの指導に関する先行研究のポイントをまとめると次の通りである。日本語オノマトペは国語教育において重要な項目として取り上げられているのにもかかわらず、学習者用の日本語教科書・教材においてあまり取り上げられておらず、日本語オノマトペが日本語教育において十分に重視されていない。しかも、取り上げられる場合も、短文に区切られているため、オノマトペの意味とオノマトペが使われている場面の把握が困難である。また、オノマトペが豊富な言語を母語とする学習者に教える場合でも、日本語オノマトペと母語におけるオノマトペの意味にずれがあるため、必ずしも有効ではないということも指摘されている。このような現状において、「日本語オノマトペを日本語教育に積極的に導入すべき」という考え方と「語彙の習得にかかる学習者の負担も大きいのに、数も多い

上に、付随的な要素であるオノマトペを学習させる必要はない」という2つの考え方に分かれている。筆者としては、日本語オノマトペを日本語教育の早い段階から積極的に導入すべきという主張をとっている。筆者と同じ考え方で、日本語オノマトペを早い段階から導入すべきと主張している研究者の間では、「どのようなオノマトペ」を「どのように教えるか」という問いに対する答えを探ろうとする姿勢が見られる。「どのようなオノマトペ」を教えるかという問いに対し、オノマトペの「基本語彙選出」に試みる研究がいくつかある。日本語オノマトペの基本語彙選出に関する先行研究は各種ジャンルから出現頻度だけに注目し、出現頻度で上位のオノマトペを抽出するやり方が主流であったが、最近の研究は「出現頻度」とともに「親密度」も加えて抽出するようになった。日本語オノマトペを「どのように教えるか」という問いに関する先行研究では、いくつかオノマトペ指導法の提案をしているが、これらは理論だけで、実際に学習者に教え、縦断的にその効果を検討する研究はほとんど見られない。

日本語オノマトペの学習に関する先行研究をまとめると次の通りになる。日本語オノマトペは上級学習者でさえあまり適切に使用できていないのが現状である。学習者にとって学習・習得が難しく、難関の一つであるということがしばしば指摘されている。この原因として、日本語オノマトペは感覚的で理屈で割り切れないため、日本語の環境と接触していない人にとっては理解・使用が難しい、日本語教育において積極的に導入されていない、オノマトペ辞書の記述に不整備があることなどが考えられる。学習者が日本語オノマトペをどの程度使用できているかについての実証研究がここ数年登場してきているが、対象にされているのはすべてオノマトペを豊富に持たない中国語を母語とする学習者である。しかし、母語が定着してから外国語を勉強する際に、母語を頼りにしながら外国語を習得していくという成人型の学習では、母語の影響を無視することはできない。母語にオノマトペが豊富に存在し、母語にもオノマトペを頻繁に使う習慣がある学習者による日本語オノマトペの使用実態、習得状況に関して、母語にオノマトペが少ない中国人学習者とは異なる結果が予想される。

一方に、日本語オノマトペの学習支援・教材開発への取り組みが見られる。オノマトペの学習支援教材として、絵カード、フラッシュがついている動画などがあるが、これらの教材を開発するには時間と費用がかかるため、対象にしているオノマトペが非常に少なく、しかも、簡単にアクセスできる状況とは言えない。

このように、日本語オノマトペの指導においても学習においても上記のような問題点がある。学習者の日本語オノマトペ学習効果を高めるためには、指導の改善とともに、学習者のオノマトペに関する学習意欲、母語におけるオノマトペの使用実態、日本語オノマトペの使用実態を明らかにした上で、オノマトペ学習に影響している要因を総合的に評価することが必要であると思われる。

このため、本研究では、先行研究の知見を参考にしつつ、その問題点も考慮した上で、それを解決するためのリサーチ・デザインを設計し、上述の四つの研究課題の解決を試みた。その調査結果を、第5章から第9章において詳述した。

第5章は調査の概要について述べた。第4章で述べたように、「どのような日本語オノマトペ」を優先的に導入すべきかという「オノマトペの基本語語彙選定」の研究がなされているが、調査対象としている言語資料はほとんど書き言葉に属しているものである。しかし、書き言葉のジャンルにおけるオノマトペは数が多く、バリエーションも多いため、その意味と用法を理解・使用できるのは難しいところがある。学習者の場合、日本語母語話者の日常会話に頻出するオノマトペの意味・用法を把握できれば、日本人とのコミュニケーションにすぐに役に立つと思われる。本研究の目的は学習者の日本語オノマトペ産出を検討するため、どのような日本語オノマトペを調査対象にすべきかが悩ましい。書き言葉に頻出するものと話し言葉に頻出するものの両方を調査対象にするのが理想的であるが、そうすると、調査協力者への負担が重過ぎると思われる。そこで、本研究では、書き言葉に頻出するものと話し言葉に頻出するものの重なっている部分、つまり、書き言葉においても話し言葉においても頻出するオノマトペを本研究の調査対象としている。書き言葉に頻出するものと話し言葉に頻出するものを組み合わせ、重なっている部分を抽出した後、日本語教育を専攻している日本語母語話者に示し、取り除くべき語を選定してもらい、最終的に21語のオノマトペを調査材料としている。そして、選出できた21語のオノマトペが日常会話に使われている場面と同じようにそれぞれの描写文の作例に努めた。作例の中で、オノマトペの部分が下線のブランクになっている。意味の理解に影響されないように、21描写文を再生する21シーンからなる動画を独自で制作した。研究課題にそって調査を実施した。具体的には、次の通りである。調査のステップ1では、アニメーションを見て、回答用紙にある各描写文の下線のところに、アニメーション画像にふさわしいと思われるオノマトペを記入する。わからない場合は自分の知識を生かし自分なりのオノマトペを創作してもらうように指示した。これによって、学習者が日本語オノマトペをどのくらい適切に使用できているか、または、該当のオノマトペがわからない場合に創作した語にどのような傾向が見られるかを知ることができた。調査のステップ2では、日本語学習歴、オノマトペ学習に対する意識、オノマトペの学習方法、学習者の母語におけるオノマトペの使用習慣などに関するアンケート調査に答えてもらった。これによって、学習者の学習背景、オノマトペに対する意識、オノマトペの学習方法、それぞれの母語におけるオノマトペの使用習慣などを知ることができる。調査のステップ3では、同じアニメーションを用い、それぞれの母語で描写してもらう。これによって、学習者の母語におけるオノマトペの使用実態、学習者の母語に日本語オノマトペと対応している語があるかどうかを知ることができる。

調査協力者であるが、ベトナム国内の大学の日本語学部1年生、2年生、3年生の学生と日本に滞在中のベトナム人留学生（日本在住期間3年から12年）、及び中国国内の大学にいる学部3年生の中国人学習者である。そのうち、ベトナム人留学生グループは全員日本語能力試験のN1資格を有し、3年生の学習者のほとんどがN2資格を有し、2年生の学習者はほとんどがN3資格を、1年生の学習者はN3かN4資格を有する。統制群は日本語母語話者の20名であるが、統制群には調査のステップ1だけに協力してもらった。必要に応じて、一部の学習者に対して、フォローアップ・インタビューを実施した。

第 6 章は、調査のステップ 2 に学習者が記入した内容に基づき、学習者の日本語オノマトペの学習意識と学習方法などについて考察した。日本語オノマトペに対する意識であるが、「日本語オノマトペ（擬音語・擬態語）という語群があることを知っていますか」という質問に対して、ベトナム人学習者全員が「はい、知っている」と答えたのに対し、同じ答えをした中国人学習者は 60%であった。また、日本語オノマトペが面白いかどうか、日本語オノマトペをもっと覚えたいかどうかということについて、ベトナム人学習者と中国人学習者の間で答えが分かれ、ベトナム人学習者のほうが、中国人学習者より日本語オノマトペに対して興味を持っていることがわかった。さらに、母語で話す時でも、母語においてオノマトペを使う習慣がある学習者の割合から見ると、ベトナム人学習者のほうが中国人学習者より遥かに高いこともわかった。そして、日本人と話す時に、ベトナム人学習者のほうが、中国人学習者より日本語オノマトペを積極的に使おうとしている意欲が高いこともわかった。

今回の調査材料となっている 21 語のオノマトペをどこで覚えたかという質問の回答から、日本語オノマトペの学習は日本語の教科書より、「アニメ」「漫画」「歌」などといったクラスの外で学ぶことが多いように思われた。また、文章などにおいて、未知のオノマトペに出会った時の対応について聞いたところ、中国人学習者は漢字で書かれている文字をほぼ理解できているため、理解を漢字に依存し、ひらがな・カタカナで書いてあるオノマトペを軽視する傾向があるようで、ベトナム人学習者の場合、日本語学習歴が長い人ほど、留学経験が長い人ほど、未知のオノマトペを無視する傾向が多くなるとともに、辞書を頼りにする意識も薄れていく傾向が観察された。日本語オノマトペの学習方法についてであるが、ベトナム人学習者の約 3 分の 2 は日本語オノマトペを学習する際に、母語と対応させて覚えているのに対し、中国人学習者にはこの方法を採用しているのが 15%である。つまり、中国人による日本語オノマトペの学習において母語における対応語の役割がはっきりしていないと思われる。因みに、日本語オノマトペを学習する際に、「一緒に使われる動詞とセットで用法まで覚える」という学習方法を採用しているベトナム人学習者の割合と中国人学習者の割合はともに 40%ぐらいで、ほぼ同じである。最後に日本語オノマトペの学習に母語の知識が有利かどうかという質問に対して、「有利」と考えている中国人学習者は 30%であるのに対して、ベトナム人学習者は 62.5%である。このように、中国人学習者より、ベトナム人学習者のほうが、日本語オノマトペに興味を持ち、日本語を使う時も、母語で話す時も積極的にオノマトペを使用し、日本語オノマトペを学習する際に、母語の知識を有利に感じていることがわかった。

第 7 章はベトナム人調査のステップ 1 の結果に基づき、ベトナム人学習者と中国人学習者がどの程度日本語オノマトペを「適切に使用できている」かについて考察した。日本語オノマトペを「適切に使用できている」かどうかを見るためにオノマトペの「正答率」の基準

を設けた。本研究における日本語オノマトペの「正答率」は統制群である日本語母語話者が回答した語の中で、本研究におけるオノマトペの基準を満たしている語である。正答と認められているオノマトペのすべては筆者が意図している 21 語のオノマトペと重なっているわけではない。しかし、同じ問題に対して、同じオノマトペを回答した日本語母語話者の平均回答一致率が 72%であり、3 分の 2 を占めている。つまり、同じ場面において、日本語母語話者 3 人のうち 2 人までが同じオノマトペで表現している。学習者による正答率については次のようにまとめることができる。中国人学習者 3 年生グループの平均正答率は 29%であるのに対して、ベトナム人学習者 3 年生グループの正答率が 55.1%とかなり高いが、これはベトナム語において、日本語オノマトペの対応語が多く存在し、ベトナム人学習者が日本語オノマトペの学習において強みを持っていることの表れであろう。ベトナム人学習者だけの正答率を見ると、平均正答率が「留学生グループ」「3 年生グループ」「2 年生グループ」「1 年生グループ」の順となっている。つまり、日本語能力が高ければ高いほど日本語オノマトペをよく使用できていることが示唆された。学習者が出した回答の中で、正答率が高いのは「どんどん」「にこにこ」「がんがん」「ぴったり」「ほっ」「あっさり」といった語であったが、これらの語は日本語教科書に取り上げられているオノマトペでもあり、使い方がはっきりしているため、学習者が十分に習得できていると考えられる。しかし、この中で、「どんどん」と「ちゃんと」は既知率が 100%であるのに、正答率が思ったほど高くないのはそれがオノマトペと思われぬ可能性があると考えられる。両国の学習者がほとんど正答できないのは「ぐっ」というオノマトペであったが、ここのオノマトペの既知率が低いという理由もあるが、日本語特殊の表現で、学習者の母語にはこのようないい方が存在しないということが主な原因だと思われる。全体的に見ると、ベトナム人学習者のほうが中国人学習者より日本語オノマトペを適切に使用できているということが示唆されたが、これはベトナム人学習者と中郷人学習者の母語におけるオノマトペの使用実態と日本語オノマトペに対する学習意識の違いによるものと思われる。

第 8 章も第 7 章と同じように、調査のステップ 1 の結果を採用しているが、考察対象としては、正答以外のところである。具体的には、正答と「無回答」以外のところに、学習者が産出した語にどのような傾向が見られるかを考察した。そして、フォローアップ・インタビューとそれぞれの母語での描写内容を参考にしながら、それぞれの母語の転移についても検討した。全体的に見ると、両国の学習者が産出した語の中で、ABAB 型の語が圧倒的に多かった。これは、学習者にとって、日本語オノマトペはこの ABAB という反復形をしている言葉だというイメージが強いことを意味している。そして、ベトナム人学習者と中国人学習者が産出した語の中で同じような傾向が見られるが、母語の転移の現れが異なっていることがわかった。

両国の学習者が似ているという点で言えば、両者により産出された語の中で「知っている語の語基の反復」「物事の状態を擬音的に捉えて造語する」「意味の似ている日本語オノマト

ペとの混同」「発音が似ている日本語オノマトペとの混同」といった傾向が観察された。第3章では、日本語、ベトナム語、中国語におけるオノマトペの中で、何らかの「反復形」を持つ語が多く存在することがわかっている。つまり、学習者は「反復」という造語法について認識しているはずである。実際、学習者は、未知の日本語オノマトペを産出する際に、知っている語の語基を反復させ、自分なりのオノマトペを産出するという傾向が両国の学習者に共通して見られた。しかし、両者の異なりという点に着目すると、母語での言い方を頼りにしている姿はベトナム人学習者のほうが目立っていた。同じく「物事の状態を擬音的に捉えオノマトペを産出する」という傾向も共通して見られたが、ベトナム人学習者は母語での言い方を想定し、そのまま記述してオノマトペを産出したことがわかった。

第9章は調査のステップ3に基づき、ベトナム語と中国語での描写内容を考察した。ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの使用実態と産出傾向との関連性を見るため、両国の学習者が使用しているベトナム語・中国語の中で、オノマトペがたくさん使われているか、日本語オノマトペに意味が対応している語がどのくらいあるか、それぞれの母語話者間の回答一致率がどのくらいあるかという視点から分析を行った。その結果、同じ場面において、ベトナム人学習者と日本語母語話者はオノマトペを積極的に使用し描写しているのに対して、中国人学習者はオノマトペをあまり使っていない、オノマトペの代わりに、一般の動詞や形容詞を使用し描写していることがわかった。これは第3章で述べたように、中国語にはオノマトペ（特に擬態語）が少ないことと、動詞によって物事の状態を細かく描写することができることによると思われる。回答一致率を見ると、ベトナム人学習者の回答一致率は61%で、日本語母語話者の72%に比べてさほどの差がないのに対し、中国人学習者の回答一致率は26.9%で低かった。これは、同じ場面において、日本語母語話者とベトナム語母語話者が中国語母語話者に比べ、より共通の感覚を持っていることを示唆している。最後に、学習者の回答の中で、日本語オノマトペと意味が対応している語の割合を見ると、ベトナム語は81.7%で、中国語は60.7%であった。成人型の外国語の学習には、目標言語と母語の間に対応している部分が多ければ多いほど上達に有利であると言われているが、上記のような結果から、日本語オノマトペの学習において、ベトナム人学習者は中国人学習者より有利であると言えよう。

一方、学習者が産出した語の中で、母語の転移によるものと思われる例はベトナム人学習者のほうがずっと多かった。これは、ベトナム人の調査協力者の人数のほうが多いことも影響しているかもしれないが、日本語オノマトペの学習において、ベトナム人学習者のほうが母語の知識を生かして学習していることを意味しているのではないと思われる。

このように、これまで、日本語オノマトペの学習・習得は日本語学習者にとって難関であるということがしばしば指摘されているが、今回の実証研究では、日本語オノマトペの使用実態と母語におけるオノマトペの使用実態に関して、ベトナム人学習者と中国人学習者の

間ではかなり異なる実態が観察された。要因として、日本語オノマトペに対する学習意識、それぞれの母語におけるオノマトペの使用習慣、それぞれの母語における日本語オノマトペと対応している語の存在、日本語と学習者の母語の表現のずれなどが考えられる。これからの日本語オノマトペ教育への提案として、日本語教師は以下のことをすべきではないかと考える。